

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月24日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04167

研究課題名(和文) 愛着と共感性の意識的・無意識的側面の関連とそれらが社会適応に及ぼす影響

研究課題名(英文) Relationships between conscious and unconscious aspects of attachment and empathy, and their effects on social adaptation

研究代表者

福井 義一 (Fukui, Yoshikazu)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：20368400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：愛着と共感性について、共に質問紙で意識的側面を、実験で無意識的側面を測定して、両者の関連を検討した。愛着の無意識的側面の測定には、潜在連合テストを用い、共感性の無意識的側面を測定するためにMET-CORE2という実験課題の日本語版を開発した。愛着の意識的側面は共感性の意識的側面と、愛着の無意識的側面は共感性の無意識的側面と関連が強いことが分かった。また、それぞれが単独で社会的適応に影響するというよりは、意識的側面と無意識的側面の不一致が、社会的適応に悪影響を及ぼすことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、愛着と共感性の意識的側面と無意識的側面の不一致が、社会的適応に悪影響を及ぼすことが示唆された。MET-CORE2という実験課題の日本語版を開発したことで、共感性の無意識的側面を測定することが可能になった。また、表情の情動認知をする際の視線運動を測定することで、不安定愛着の人々と安定愛着の人々の間に表情画像の見方の違いがあることが判明し、それが共感性の低下の背景にある可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We investigated the relationships between attachment and empathy by measuring conscious aspects by questionnaire and unconscious aspects by experiment. For measurement of unconscious aspects of attachment, Implicit Association Test was used, for measurement of unconscious aspects of empathy, Japanese version of MET-CORE2 was developed. It is found that conscious aspects of attachment was strongly related with conscious aspects of empathy, whereas unconscious aspects of attachment was strongly related with unconscious aspects of empathy. And it is also founded that discrepancies between conscious and unconscious aspects have bad influences on social adaptation rather than each conscious or unconscious aspect dose independently.

研究分野：臨床心理学

キーワード：愛着 共感性 社会適応 潜在連合テスト MET-CORE2 表情の情動認知

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

愛着とは、子どもが自身の安全と生存の確保のために養育者との近接を維持しようとする行動システムのことで、養育者との相互作用によって形成される。愛着は、養育者との関係を通して「自己」と「他者」への主観的な信念や期待といった2つの内的作業モデル（Internal Working Model：以後 IWM）を形成し、青年期や成人期の良好な対人関係、ひいてはメンタルヘル스에 多大な影響を及ぼすと考えられている。我々は、成人愛着が虐待的養育環境で育った者の共感性の低下（大浦・福井，2013a）や情動コンピテンスの低下（福井・島，2012）および感情調節の困難さ（大浦・福井，2013b）の媒介要因となること、表情の情動認知（共感性の一つで表情から相手の情動を推測すること）に影響を及ぼすこと（島・福井ら，2012）を明らかにしてきた。

しかしながら、IWM は通常は無意識（潜在）的に働くことが指摘（坂上，2005）されているにも関わらず、従来の愛着研究の多くは IWM の意識（顕在）的側面のみを測定していた。顕在面と潜在面は異なる対象を予測するため（藤井・上淵，2011）、これらの研究について潜在面も含めて再検討する必要があると思われた。IWM の潜在的側面の測定として Main ら（1985）の成人愛着面接（Adult Attachment Interview：以後 AAI）があるが、コード化も容易でないこと、また愛着の分類も両親との関係性に基づいて行われているという限界があった。そこで、申請者らはロールシャッハ・テスト（投影法）を用いて潜在面を測定する試みを行ってきた（福井ら，2009，2011）が、やはり結果のコード化が困難であるという限界があった。以上から、IWM の潜在的側面の測定について実施と数量化が容易な方法が必要となったため、近年注目されている潜在連合テスト（Implicit Association Test: IAT；Greenwald et al., 1998）を用いた研究を行ってきた。IAT は主に社会心理学系で発展し、海外では差別に関する研究などに用いられていたが、近年では抑うつや不安の測定など臨床心理学の分野にも導入されるようになってきた。愛着については、山田・藤井（2011）が潜在的 IWM を測定する IAT を開発している。

申請者らは、IWM の顕在的側面を質問紙で、潜在的側面を前述した IAT で測定し、その時点までに以下のことを明らかにしてきた。① IWM の自己モデルの顕在面が肯定的で、潜在面が否定的な場合、感情の統制が強まる。② IWM の自己モデルの顕在面が肯定的で、潜在面が否定的な場合、一部の情動コンピテン스가高まる。③ IWM の自己モデルの顕在・潜在面の不一致により抑うつ感情（不快感情）が生じる。④ IWM の自己モデルの潜在的側面が否定的である場合、対人領域におけるネガティブライフイベントを多く経験する。⑤ IWM の自己モデルの潜在的側面と共感性の構成要素である視点取得（他者の立場で物事を考えること）の間に正の相関がある。そこで、申請者らは一連の研究結果から、顕在・潜在的 IWM、共感性、ネガティブライフイベント、社会的適応および精神的健康についての仮説モデルを設定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、愛着の内的作業モデルと共感性の関連について、意識的・無意識的観点から明らかにすることである。内的作業モデルは無意識的に働くため、従来の質問紙調査では十分に捉え切れていない可能性がある。そこで申請者らは、近年注目されている潜在連合テストを用いて内的作業モデルの無意識的側面を測定したところ、それが否定的であるほど対人関係において不適応を示す可能性が示唆された。本研究では、対人領域の不適応の背景に共感性の低下を仮定しその検証を行うが、共感性も意識（顕在）的指標である質問紙と無意識（潜在）的指標である表情の情動認知課題や多次元共感性テストを実施する。さらに、実験協力者が表情や状況のどの部分から、判断に必要な情報を得ているかを検討するために視線の動きも測定する。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法で行った。① 顕在・潜在的 IWM と共感性の顕在面を測定する「多次元共感性尺度」（鈴木ら，2008）との関連を明らかにする。② 顕在・潜在的 IWM と共感性の潜在面を測定する「表情の情動認知課題」との関連を明らかにする。③ 顕在・潜在的 IWM と共感性の潜在面を測定する「多次元共感性テスト」との関連を明らかにする。このテストは、表情だけでなく非言語的な側面や相手の置かれている状況から相手の情動を推測するという点で表情の情動認知課題と異なるが共感性の程度を客観的に測定できるが、日本語版が存在しないため開発する。④ の課題において、実験協力者は表情や状況のどの部分から、判断に必要な情報を得ているかについてアイトラッカー（実験協力者の視線の動きを感知する）を用いて測定し、顕在・潜在的 IWM との関連を明らかにする。

4. 研究成果

① 顕在・潜在的 IWM が共感性の顕在的側面を測定する「多次元共感性尺度」（鈴木ら，2008）との関連を検討した結果、顕在的 IWM は関係不安・回避の両次元が共感性の他者指向的側面である視点取得や共感的配慮、自己指向的側面の想像性を低下させていたのに対し、潜在的 IWM は関係不安のみが視点取得を低下させていた。以上より、共感性の顕在的側面に対しては、主に顕在的 IWM が影響を及ぼしていることが示唆された（雑誌論文①）。

② 顕在・潜在的 IWM が表情の情動認知課題に及ぼす影響を検討した結果、顕在的 IWM につ

いては、関係不安の次元が表情と一致しない情動の読み取りを促進するのに対して、関係回避の次元は、表情と一致する情動の読み取りを抑制することが示された（学会発表②）。さらに、潜在的 IWM については、関係回避の次元が、表情の情動認知時の反応時間を促進することが明らかとなった（学会発表⑧）。以上より、顕在・潜在的 IWM は、表情の情動認知の異なる次元に影響を及ぼしていることが示唆された。

③多次元共感性テストの原版がドイツ語であったことから、日本語版を開発し、その信頼性と妥当性の検討を行った（学会発表⑦）。さらに、多次元共感性テストで測定された共感性の無意識的側面に対して、顕在・潜在的 IWM が及ぼす影響も検討した結果、多次元共感性テストで測定された情動的共感に対して、顕在的 IWM の関係不安が促進効果を、潜在的な IWM の関係回避が抑制効果を及ぼすことが分かった。しかし、多次元共感性テストで測定された認知的共感に対しては、顕在・潜在的 IWM は有意な影響を及ぼしていなかった。なお、邦訳版の多次元共感性テストは、信頼性係数が低かったことから、その後各項目の訳語を修正し、再度信頼性の検討を行っている（学会発表③、④）。

④顕在的 IWM が表情の情動認知時の視線運動に及ぼす影響を検討した結果、関係不安の次元が、顔の中心付近への注視時間を減少させていた（学会発表①）。そのため、関係不安の高い人々は、顔の中心付近への注視が困難であることが原因で、正確な表情の情動認知が困難となっている可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ①大浦真一，松尾和弥，福井義一，愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが対人スキルと社会適応に及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—，甲南大学紀要. 文学編，査読無，168 巻，2018，135-153

〔学会発表〕（計 80 件）

- ①松尾和弥・大浦真一・島 義弘・稲垣 勉・福井義一，内的作業モデルが表情の情動認知時の視線運動に及ぼす影響—パイロットスタディー，日本感情心理学会第 26 回大会大会プログラム，2018，39，東洋大学，東京
- ②松尾和弥・大浦真一・島 義弘・稲垣 勉・福井義一，被虐待経験と内的作業モデルが表情の誤検出量に及ぼす影響，日本心理学会大会論文集，2018，55，仙台国際センター，宮城
- ③福井義一・大浦真一・松尾和弥・稲垣 勉・島 義弘，共感性を客観的に測定する MET-CORE2 日本語版の信頼性の検討（2）—再検査信頼性の検討—，日本心理学会大会論文集，2018，696，仙台国際センター，宮城
- ④福井義一・松尾和弥・大浦真一・島 義弘・稲垣 勉，共感性を客観的に測定する MET-CORE2 日本語版の信頼性の検討（1）—記述統計量と内的整合性の検討—，一般社団法人 日本健康心理学会第 31 回大会 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 20 回大会合同大会，発表論文集，2018，120，京都橘大学，京都
- ⑤松尾和弥・大浦真一・島 義弘・稲垣（藤井）勉・福井義一，被虐待経験と内的作業モデルが表情の解釈バイアスに及ぼす影響—表情刺激の表出強度に着目して—，日本心理学会第 81 回大会，日本心理学会第 81 回大会発表論文集，2017，309，久留米シティプラザ，福岡
- ⑥大浦真一・松尾和弥・稲垣（藤井）勉・島 義弘・福井義一（2017）顕在・潜在的内的作業モデルが対人ライフイベントの経験頻度に及ぼす影響—Single—Target Implicit Association Test（ST—IAT）を用いて—，日本心理学会第 81 回大会，日本心理学会 81 回大会発表論文集，2017，41，久留米シティプラザ，福岡
- ⑦福井義一・大浦真一・松尾和弥・稲垣（藤井）勉・島 義弘，共感を客観的に測定する MET—CORE2 日本語版の作成—その信頼性と妥当性の検討—，日本感情心理学会第 25 回大会，プログラム，2017，30，同志社大学，京都
- ⑧大浦真一・松尾和弥・稲垣（藤井）勉・島 義弘・福井義一，被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが表情の情動認知時の反応時間に及ぼす影響—表出強度の異なる表情を

用いた予備的研究一，第16回日本トラウマティック・ストレス学会，プログラム・抄録集，2017，110，武蔵野大学，東京

⑨Matsuo Kazuya, Oura Shin-ich, Shima Yoshihiro, Inagaki Tsutomu, Fukui Yoshikazu, Effects of childhood abuse and internal working models of attachment on recognizing facial emotions: Examined by manipulating strength of expressions 15th Conference of European Society for Traumatic Stress, Programbook, 2017, 266-267, University of Southern Denmark, Odense, Denmark.

⑩Oura Shin-ichi, Matsuo Kazuya, Fukui Yoshikazu, Effects of Internal Working Models of Attachment on Social Adaptation 2 -From the perspective of size and direction of discrepancy between explicit and implicit aspects of IWM. Poster presented in The 31st International Congress of Psychology 2016, Programbook, 2016,145, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：島 義弘

ローマ字氏名：Shima Yoshihiro

所属研究機関名：鹿児島大学

部局名：法文教育学域教育学系

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00631889

研究分担者氏名：稲垣 勉

ローマ字氏名：Inagaki Tsutomu

所属研究機関名：鹿児島大学
部局名：法文教育学域教育学系
職名：講師
研究者番号（8桁）：30584586

(2)研究協力者

研究協力者氏名：大浦真一
ローマ字氏名：Oura Shin-ichi

研究協力者氏名：松尾和弥
ローマ字氏名：Matsuo Kazuya

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。